

金沢美知子編  
 「ロシア 18 世紀論集」No.2  
 東京大学スラブ語スラブ文学研究室  
 2002 年, 189 頁

佐藤 純 一

本書は平成 12-14 年度の科学研究補助金を受けて実施された「18 世紀ロシアの文化的コンテクストに見る小説文学の成立と発展」の題目による共同研究(代表は金沢氏)の成果の一部であるが、内容・体裁ともに 1999 (平成 11) 年 6 月に金沢氏の責任編集により刊行された同名の論文集の後を継ぎ、この分野の研究の拡大発展を目指すものであることは明らかである。今回は、金沢氏自身と東大の院生 6 氏の論文 6 編と翻訳 4 編のほかに、川端香男里・藤沼貴両氏の寄稿も収める内容となっている。評者はロシア語史研究に携わる者として、18 世紀のロシア語の実態の解明に関心を抱き、また、嘗て『ロシア文学史』(川端香男里編, 東大出版会, 1986) 中の 18 世紀の部分の分担者の一人ではあったものの、文学研究の面では dilettante に過ぎないので、以下の拙文では、編集委員会の委嘱を断れなかった一愛好者の素朴な感想の一端を記すのみである。

まず、川端氏の『18 世紀研究の意味』(pp. 108-109) は、ピョートルからアレクサンドル 1 世までの 18 世紀ロシアの「近代化」の過程の研究の重要性と難しさを指摘するとともに、ヨーロッパおよび世界の 18 世紀研究との関わりと普遍的な文化史研究の視点を見失わない努力の必要を説く趣旨の適切な指針である。一方、藤沼氏は『最近の日本における 18 世紀ロシア文学研究』(pp. 110-114) の中で、最近 7 年間のこの分野の成果を全般にわたって詳しく論評しているが、それ以前と比較して質量ともに著しい発展を遂げたものと評価し、東大と早大の院生を中心とする若い世代の研究者の活躍に今後の発展への期待を託している。藤沼氏のこの論評は、1995 年 6 月発表の論文『日本における 18 世紀ロシア文学研究史概観』(雑誌『ユーラシア研究』第 8 号 pp. 22-27) の続編であり、両者併せて、馬場佐十郎以来二百年に迫る日本のロシア研究の中の 18 世紀ロシア文学研究の歴史と位置づけを知るのに不可欠の手引きとなっている。

さて、研究グループの中心である金沢氏は、論文『ロシア・センチメンタリズムに見る死への憧憬と離郷願望』(pp. 52-64) と、翻訳 2 点 (pp. 133-136, Милонов, Н.П., «История Бедной Марьи» [1805] ; pp.

137-145, Измайлов, А.Е., «Бедная Маша» [1801]) を発表しているが、翻訳された作品は論文の所説の傍証の役割も果している。カラムジンの『哀れなリーザ』に代表される、この時期の「悲劇型センチメンタル小説」を「故郷を捨てた娘たちの物語」と捉え、ここに西欧の文学伝統と異なるロシア・センチメンタル小説特有の叙情性の表現を見る論旨は、従来お決まりの、被搾取階級のヒロインの悲劇への挽歌という見方に対して、全く新鮮な、より説得力を持つ解釈を提出したものと考える。すなわち、これにより、彼女らをプーシュキンの『駅長』のヒロインのドゥーニャの原型と見なす観点が導かれ、ロマン主義への発展の道筋が示される結果となっているからである。

東大における金沢氏の一連の研究・教育活動を契機として、1999 年以後最近に至る 18 世紀ロシア文化研究の広汎な活性化が始まったとするのは、藤沼、川端両氏とともに評者にも共通の認識であり、従来散発的な形に過ぎなかったこの分野の研究の今後の組織化と統合・発展を目指す運動の中心としての金沢氏の活躍に期待する所以である。

院生諸氏の研究は、鳥山祐介氏の論文『ロモノソフにおける崇高——「聖化」の修辞学』(pp. 1-22) と翻訳『フェリーツァ』(pp. 123-132, Державин, Г.Р., «Фелица» [1782]), 金春和氏の論文『クニャジニンの悲劇『ディドーナ』について』(pp. 23-35), 安達大輔氏の論文『カラムジンの初期評論に見る翻訳の表象』(pp. 36-51), 乗松享平氏の論文『ベリンスキーとロシアの 18 世紀——「ロシア史」はいかに語られるか』(pp. 65-83), 大野斉子氏の論文『18 世紀ロシアの磁器——帝室工房の発展と宮廷の食卓にみる磁器の歴史』(pp. 84-107), 大塚えりな氏の翻訳『カラムジンの世界観の進化 (1789-1803)』(pp. 146-187, Лотман, Ю.М., «Эволюция мировоззрения Карамзина (1789-1803)» [1957]) の 7 点で甚だ賑やかである。

評者は不幸にして上記の各位の誰とも個人的な付き合いがなく、これまでは学会レベルの研究発表や論文等を通じてのみ、その名前や仕事を知るに過ぎなかったが、敢えて一読しての感想を述べる。

冒頭を飾る鳥山論文は、欧米とロシアの最新の研究に立脚して、ロモノソフとトレジャコフスキイの詩論と頌詩のテキストを比較検証し、ロモノソフにおける「聖化」をその修辞法の中に実証したもので、その精密周到な論考は称賛に値する。ただ、ロンギノス＝ボワローの崇高論からの逸脱を、ロシアにおける古典主義受容の特徴としてポジティブに認める視点を初めから明確に提示すれば、論文の出だしと結びの間

の違和感は解消されたのではなからうか。

同氏のものした『フェリーツァ』の試訳は残念ながら失敗と言わざるを得ない。確かにこの「頌詩」は漢詩よりは藤村の「新体詩」のリズムに近いとはいえ、「崇高」をちりばめ脚韻を揃え、精密な男性韻と女性韻の規則的な交替のテクニックを見せつける、凝りに凝ったこのヤンプ4脚10行の26連を同じレベルの日本の韻文で「訳す」ことは不可能である。リズムを取れば意味が犠牲になるのは当然で、しかもリズムだけで「ことば」に統一が欠け、品格も著しく劣るとなれば、言及された除村ヤエ女史の「見事な翻訳」を見てみたいと思うのが自然であろう。1813年にデルジャーヴィンの「Представь по светлости лазуря,/По наклонению небес,/Взошла чернобагрова туча/и грозно возлегла на лес.»を「空天ノ蒼々タルト/天ノ転化スルトヲ以テ思ヒ知ル/黒雲雷雲上騰シ/林ニ及ビ横ハルヲ見届ケヨ」と訳した馬場佐十郎以来、韻文の和訳は最大の難問であり、たとえ韻律は犠牲にしても、正確な逐語訳こそが外国語の韻文の理解と鑑賞を助けるというのが評者の見解である。

金氏のクニャジュニーン研究は、学会発表(1998)および前回の論集(1999)に続く3作目と思われるが、クニャジュニーンに対するイタリア演劇の影響について全般的に論じた前二作に対して、初めてクニャジュニーン作品の具体的な研究を手掛けている。『ディードーナ』とヴェルギリウスの叙事詩『アエネアース』の物語およびメタスタジオの恋愛劇『捨てられたディードー』との比較対照は興味深いテーマであるが、論文としては未完成であり、中心となる論旨の具体的な証明や展開に乏しい、アイデアの提示の段階に留まっている印象を受けた。(章立ての番号が3から5に跳んでいるのは単なる誤記か。)何よりもスマローコフに発するロシア古典主義悲劇の発展の流れの中でクニャジュニーン作品を見る視点が必要であろう。

安達氏の著作はこれが初見であるが、博学且つ才気溢れる饒舌さに目を見張らされるものの、のらりくらりととめどなく続く晦渋な表現に飾られたその主張の単純さには二重の驚きを感じさせられた。もし、「カラムジンが「ロシア」という記号を語るとき、普遍主義と特殊主義は対立する関係にあるのではなく、むしろ相互に補完的な(supplemental)関係にある」というのがこの論文の主旨だとすれば、これだけの長広舌は必要ではなかったろう。評者はこの問題の最も重要なポイントは、注に引かれたВ.М. Живовの研究が指摘するところの、『ロシア人旅行者の手紙』と『ロシア国史』に見る「同一の」語の表記の差に表れた、カ

ラムジンのロシア語認識の差にあると見るが、「しばしばロシア的独自性の「発見」へとつながってしまうような、ナショナリズムの単一あるいは複数の、いずれにしても同一化可能な起源の探索には興味はない。むしろ、その「起源」とされる地点において「ナショナリズム」の/についての語りを可能にする複数の地層を分析する作業へと、本稿を差し向けて行くことにしよう。」といった類の、カラムジンにおける翻訳の「問題系」の考察を対象とするらしい空虚な「言説」の真意をいぶかしむばかりである。

乗松論文は、18世紀研究を主旨とするものではなく、ベリンスキー研究の範囲内にあるが、彼にとっての18世紀ロシア文学が、プーシュキンの有名な「我が国の文学はロシア新貴族と同様、祖先も系図ももたずに突如18世紀に現れた。」(«Наброски статьи о русской литературе» [1830])という認識と共通の否定的なものであったことは、当時の時代思想の反映であろう。ソ連期の文学史記述にまで影響を及ぼした彼のトレジャコフスキイへの否定的評価についてはこの『文学的夢想』中では述べられていないらしいが、ロモノーソフやカラムジンの言語に関する彼の言及を知ることが出来たのは幸いであった。

大野氏は前回の論集の『18世紀ロシアのシノワズリー』や学会誌掲載の『1840年代のロシアの木版画』(2001,学会発表は2000)などで造型の分野のユニークな研究者と承知しているが、今回の「宮廷の食卓にみる磁器」の具体的な記述は、多数の図版と併せて、評者のような物好きにとっては、良い展覧会を見るようなまことに楽しい一時を恵まれた思いであった。

最後の40頁を超えるロトマンの大論文の翻訳をなし遂げた大塚氏の努力に対しては、評者のような怠け者への何よりの贈物として感謝したい。安達氏が注で触れた『アグラヤー』の中でのルソー批判のくだりもこの訳で確かめることが出来た次第である。人名の表記にいくつか問題があるのは瑕瑾としよう。

18世紀大好き人間の同人雑誌のような祝祭の賑やかな気分を満たした本論集は、将来の日本におけるこの分野の研究の中核となるグループの活動の軌跡としての意義と同時に、18世紀ロシア文化研究の気運の新たな拡大進展の契機となることが期待される。

(さとう じゅんいち・創価大学)